
遠日初夏

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠日初夏

【Nコード】

N0199P

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

小学校6年生、あの一昨日が凝縮された日は、遠い、遠い、記憶の彼方。

〜1〜

じりじりと暑い太陽の光が窓から入ってくる。

ハヤトはじつと時計をにらみつけたが、時計の針はいつもよりもゆっくりと動いているように感じる。その遠くでは、担任の小林先生が無表情で何かを話していた。その声も暑さで遠く聞こえる。

後、五分でこの時間からも開放される。今か今かとその時を待った。

ポタリ

右のこめかみから汗が落ちて、机の成績表にシミを作った。どうせ、いい成績なんかじゃない。汗のシミがつくくらいがちょうどいいかも知れない。

「これから色々な祭りもあります。祭りというのは昔から、人間の心をつかれさせるものです。あなた達も、大人たちもうかれるので。だからこそ、あなた達はちゃんとしていなきゃなりません。おこづかいをたくさん持っていくなんてもってのほかです。人におごったり、おごられたりして・・・」

小林先生の口調はずっと同じであった。ハヤトには、もはや何を言っているのかよくわからなかった。

ふとななめ横を見ると、汗一つかかずに背筋をピンと伸ばしているマサヨシが見えた。同じ教室にいるなんて思えない。まるで暑さを感じていないように見えた。

逆に後ろを振り返ると、舌を出しながら成績表をうちわにしておいでいるのが見えた。グレーのＴシャツは、汗で黒とグレーの２色のＴシャツになっている。メガネをかけたタモツであった。

タモツは目が合うと、ロパクで何か言っていた。

「後、三分」

うんうん、とハヤトは大きくなづいた。後、もう少しで、あの日々が来る。

小学校六年生、最後の夏休みが窓の向こうで輝いているように思えた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0199p/>

遠日初夏

2010年11月20日11時53分発行